



的に、工藤は命令・依頼・推量などといった文の叙法との意味・機能的な対応関係に基づいて行為的な叙法副詞と認知的な叙法副詞を 17 個の下位カテゴリーに分け、さらにそれぞれの下位カテゴリーに属する代表的な副詞を列挙している。本調査は、工藤が挙げた 137 個（延べ語数）の代表例を『日本語能力試験出題基準』（2004）の語彙リストと対照し、目標語彙となっているかどうかを確認した。また、工藤がリストアップした「頼むから」、「できれば」、「できるだけ」、「ことによると」、「もしかすれば」のような一語形ではないものを排除した。最終的に、70 個（異なり語数）の叙法副詞が残り、この 70 個の叙法副詞を調査対象とする。

### 3. 調査の概要

#### 3.1 分析データ

調査は、国立国語研究所で公開されている『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』I-JAS を利用する。このコーパスは 12 の異なる母語を持つ海外の教室環境学習者、および日本国内の教室環境・自然環境の日本語学習者の発話データと作文データを横断的に収集し、収録したコーパスである（迫田他 2016）。収録されているデータは、話し言葉、書き言葉とともに 7 種類 12 タスクがあるため、データの多様性及び豊富性が保証できると思われる。また、本研究は中国語、韓国語、英語をそれぞれ母語とする日本語学習者の叙法使用状況を比較するため、CNS、KNS、ENS 各 50 名、合計 150 名のデータから副詞を用いた産出文を抽出した。さらに、比較のため、日本語母語話者（以下 JNS）50 名のデータも抽出した。

表 II-JAS の課題のバリエーション

	番号	課題	記号		番号	課題	記号
発話データ	①	ストーリーテリング 1	ST1	作文データ	⑤	ストーリーライティング 1	SW1
		ストーリーテリング 2	ST2			ストーリーライティング 2	SW2
	②	対話	I		メール 1	m1	
	③	ロールプレイ 1	RP1		⑥	メール 2	m2
ロールプレイ 2		RP2	メール 3	m3			
④	絵描写	D	⑦	エッセイ	e		

#### 3.2 データの抽出

データ収集は、I-JAS 付属の検索システムである I-JAS 中納言 2.4.2 短単位データ 20180502 版を用い、各副詞を「語彙素読み」と追加条件「品詞一大分類一副詞」という 2 つの条件で検索した。しかし、「品詞一大分類一副詞」という条件で検索したため、副詞の下位分類まで区別できず、叙法副詞として使われているのかが分からなくなる。また、副詞は、本来、連用修飾専門の品詞であるが、連用修飾語以外の、品詞が変わり、文の成分になることもある。さらに、叙法副詞の中には多義語が多いものもあり、各産出文での副詞の用法を判断しなければならない。そのため、抽出された産出文の Excel データを用いて、手作業で 1 つず

つ確認した。確認の結果、文の中で叙法副詞として使われたものは 3879 例であった。

CCT04-SW1：当然 気づかなかった。（副詞）

KKD23-I：当然 の責任と思って……（形容動詞 対象外）

CCT13-I：どうしても わからない……（否定）

JJJ45-I：それを どうしても 撮りたかったんで…（願望・当為）

KKD04-RP1：まあ、来週なら無理でしょうかね。

（勧誘・申し出ではない 対象外）

#### 4. 調査の結果

##### 4.1 日本語学習者と日本語母語話者における叙法副詞の使用状況の比較

本節では、日本語母語話者と比較しながら、日本語学習者における叙法副詞の全体的な使用状況を述べる。

表 2 日本語学習者と日本語母語話者の叙法副詞の使用状況

	CNS	KNS	ENS	JNS	合計
延べ数	1028 (27%)	611 (16%)	808 (21%)	1432 (37%)	3879 (100%)
異なり数	30 (43%)	25 (36%)	23 (33%)	43 (61%)	70 個の対象副詞

表 2 が示しているように、CNS、KNS、ENS が叙法副詞をそれぞれ 1028 例、611 例、808 例、合計 2447 例を使用した。日本語母語話者は 1432 例があった。この 4 者の中で、JNS の使用例が一番多かった。また、異なり数においては、CNS の使用数は 30 個で、一番日本語母語話者（43 個）に近い。その次、KNS は 25 個、ENS は 23 個であった。使用例の延べ数においては、ENS の使用数は KNS より多いが、異なり数においては ENS の使用数が KNS よりやや少ないことがわかった。ENS の学習者は同じ叙法副詞を繰り返して使用する可能性があるかと推測できる。

次に、日本語学習者と日本語母語話者における叙法副詞の使用分布を見てみる。検索対象にした 70 個の叙法副詞を①日本語学習者のみが使用したもの ②日本語学習者と日本語母語話者両者とも使用したもの ③日本語母語話者のみ使用したもの ④日本語学習者と日本語母語話者両者とも使用していないものという 4 つに分類した。学習者と母語話者の産出した叙法副詞を以上の分類に従って確認した結果は、表 3 で示している。そのうち、②の日本語学習者と日本語母語話者ともに使用したものは 45.71%であった。次は、学習者と母語話者ともに未使用のものは 37.14%であり、低くなかった。同じコーパスで同じ課題であるため、学習者と母語話者ともに使用、また未使用の叙法副詞の割合が高い傾向が予測できるだろう。母語話者のみ使用したのは 15.71%である。この 11 個の叙法副詞には具体的にどんなものがあるのかについて、次の各用法における日本語学習者と日本語母語話者の使用状況のところで見ていきたい。一方、学習者のみ使用したものは 1 例しかないことも分かった。母語話者の使用した叙法副詞の多様性は学習者より高いと言えよう。

表3 日本語学習者と日本語母語話者における叙法副詞の使用分布

	学習者のみ使用	学習者と母語話者ともに使用	母語話者のみ使用	学習者と母語話者ともに未使用
学習者	1 (1.42%)	32 (45.71%)		26 (37.14%)
母語話者		32 (45.71%)	11 (15.71%)	26 (37.14%)

以下の表4は用法別で日本語学習者と日本語母語話者の叙法副詞の使用状況をまとめた。両者の使用した用法を頻度の降順で並べ、各用法の代表的な叙法副詞の使用例も列挙しておいた。

表4 各用法における日本語学習者と日本語母語話者の叙法副詞の使用状況

学習者				母語話者			
順位	用法分類	頻度	代表例	順位	用法分類	頻度	代表例
1	推測	54.31%	多分	1	否定	38.06%	全然 なかなか 別に もう
2	否定	22.76%	全然 まだ まったく	2	推測	32.89%	多分 恐らく 確か
3	習慣・確率	14.51%	いつも 普段 必ず	3	習慣・確立	7.19%	いつも 普段 大抵
4	断定	2.78%	勿論	4	願望・当為	6.49%	ぜひ 何とか なるべく
5	願望・当為	2.17%	ぜひ 当然 何とか	5	断定	4.12%	勿論
6	確信	1.88%	絶対 きっと 必ず	6	確信	3.56%	絶対 きっと
7	質問・疑念	0.65%	なぜ いったい	7	質問・疑念	1.89%	なぜ いったい
8	意図	0.25%	わざわざ わざと	8	感嘆・発見	1.54%	なんと
9	肯定	0.20%	必ず	9	勧誘・申し出	1.19%	さあ まあ
10	感嘆・発見	0.20%	なんと	10	意図	0.84%	わざわざ わざと あえて
11	依頼	0.12%	どうぞ どうか	11	推定	0.70%	どうやら どうも
12	不確定	0.08%	あんがい	12	意志	0.56%	ひたすら
13	比況	0.04%	まるで	13	依頼	0.28%	どうぞ どうか
14	推定	0.04%	どうやら	14	不確定	0.28%	あんがい ひょっと
15	勧誘・申し出	0	さあ まあ	15	比況	0.21%	まるで いかにも
16	意志	0	あくまでも ひたすら	16	肯定	0.21%	必ず
17	伝聞	0	なんでも	17	伝聞	0	なんでも

工藤(2000)は叙法副詞を「推測」、「否定」、「習慣・確率」などの用法により、17カテゴリーに分けている。ここでは、工藤(2000)の分類に従い、日本語学習者と日本語母語話者の叙法副詞の使用状況を用法別で考察する。比較すると、日本語学習者の使用であれ、日本語母語話者の使用であれ、「推測」、「否定」、「習慣・確率」、「断定」、「願望・当為」、「確信」、「質問・疑念」用法は上位7位にある。「勧誘・申し出」、「意志」用法は母語話者に使用

されているが、学習者に使用されていない。そして、「伝聞」用法は、両者とも使用していない。

日本語母語話者のみ使用している叙法副詞には具体的にどんなものがあるのかを下に用法別で列挙していく。

#### 日本語母語話者のみ使用した叙法副詞

意志：ひたすら	意図：あえて	願望・当為：どうしても
勧誘・申し出：まあ さあ	推測：恐らく	推定：よほど どうも
比況：いかにも	不確定：ひょっと	否定：さっぱり

さらに、頻度に目を向けると、「推測」と「習慣・確率」の使用頻度においては、学習者が日本語母語話者より高いが、ほかの 15 個の用法の使用頻度においては、学習者が日本語母語話者より低い。日本語学習者が過剰使用あるいは過少使用する叙法副詞の特徴を探るために、次節では産出された叙法副詞のレベル別使用状況を見た上で、考察する。

#### 4.2 日本語学習者における叙法副詞の使用状況

本節では日本語学習者の叙法副詞の使用状況をレベル別にみていく。表 5 は検索対象にした 70 個の叙法副詞の使用あるいは未使用状況をレベル別でまとめた。叙法副詞のレベル判断は『日本語能力試験出題基準』（2004）の語彙リストを参照した。

表 5 日本語学習者のレベル別叙法副詞の使用状況

	使用 (33 個)	未使用 (37 個)
N1	当然 なんと わざわざ どうやら	ひたすら いっそ さぞ とかく 大概 大方 よほど 無論 いかにも さも ひょっと 格別 さほど てんで とうてい いまさら さっぱり
N2	全然 勿論 絶対 まったく なんとか 普段 別に 大抵 なるべく いったい めったに わざと あんがい ちっとも どうせ まるで 必ずしも	どうか なにぶん あくまでも せめて どうしても まあ なんて はたして 恐らく まさか なんでも あるいは 少しも どだい
N3	もう たしか ぜひ なかなか きっと 必ず けっして	あえて
N4	多分 いつも まだ なぜ どうぞ	さあ どうも ちょうど とても

使用されたものは 33 個、未使用は 37 個ある。使用された叙法副詞の半分以上が N2 レベルの語彙である。そして、N3 レベル、N4 レベルにはそれぞれ 7 個、5 個がある。N1 レベルは一番少なかったことが見られた。一方、未使用であったものは N1 レベルと N2 レベルに集まっている。使用・未使用を比較したら、N4 と N3 レベルでは、使用されたものは未使用であったものより多いが、N2 レベルでは使用であれ、未使用であれ、叙法副詞の数が多かった。N1 レベルでは、

未使用のものは使用のものより圧倒的に多かった。つまり、日本語学習者にとって、N4 と N3 レベルの叙法副詞は習得しやすいが、N2 レベルでは目標叙法副詞が多い一方、習得しやすいものがあれば習得しにくいものもある。さらに、N1 レベルの叙法副詞は学習者にとって習得しにくいと推測できるだろう。今回は学習者の日本語能力レベルごとの使用状況について考察していなかったが、今後は本調査の結果に基づき、さらに考察する必要があると考える。また、N4 レベルの「とても」という言葉に注目したい。一般的に、「とても」は「とても美味しい」のように程度副詞として初級レベルで教えられるが、「私にはとてもできない」のように叙法副詞としての用法はほとんど教えられていないだろう。このような用法にレベル差のある副詞の場合、どのように導入すればいいのか、どの段階で導入すればいいのかが課題になると考えられる。

次に、CNS、KNS、JNS がそれぞれ使用頻度の高い叙法副詞に絞ってみたい。下記の表 6 はそれぞれ使用頻度上位 15 位の叙法副詞である。また、比較のため、日本語母語話者の使用頻度も右側に示しておいた。

表 6 CNS KNS ENS JNS がそれぞれ使用頻度上位 15 位の叙法副詞一覧表

CNS			KNS			ENS			JNS		
順位	副詞	頻度	順位	副詞	頻度	順位	副詞	頻度	順位	副詞	頻度
☆	多分	57.98%	☆	多分	39.61%	☆	多分	57.67%	☆	多分	22.97%
☆	いつも	10.21%	☆	全然	16.53%	☆	いつも	16.34%	☆	全然	12.99%
☆	まだ	8.46%	☆	いつも	12.11%	☆	全然	7.30%	☆	たしか	7.61%
☆	全然	7.98%	4	勿論	5.73%	☆	まだ	4.46%	☆	まだ	5.80%
☆	もう	2.92%	☆	まだ	5.07%	5	勿論	3.34%	5	なかなか	5.59%
6	きっと	1.17%	☆	もう	4.26%	☆	もう	2.60%	6	勿論	4.12%
7	なかなか	1.17%	☆	まったく	2.45%	7	絶対	1.61%	7	別に	3.49%
8	絶対	1.07%	☆	たしか	1.96%	8	ぜひ	0.87%	☆	まったく	3.49%
☆	普段	0.97%	9	別に	1.96%	☆	たしか	0.87%	☆	いつも	3.14%
10	必ず	0.97%	☆	なんとか	1.64%	☆	なんとか	0.74%	☆	もう	3.00%
☆	まったく	.78%	11	なぜ	1.15%	11	大抵	0.74%	☆	普段	2.79%
12	ぜひ	0.68%	☆	普段	0.98%	☆	普段	0.62%	12	どうしても	2.72%
☆	なんとか	0.58%	13	当然	0.82%	13	別に	0.50%	13	恐らく	2.30%
14	なるべく	0.58%	14	絶対	0.82%	☆	まったく	0.50%	14	ぜひ	2.23%
☆	たしか	0.58%	15	必ず	0.82%	15	どうしても	0.50%	☆	なんとか	2.03%

15 位までのうち、4 つのグループが共通して使用している副詞（☆がついているもの）は 9 個あり、60% を占めている。つまり、学習者と日本語母語話者が頻繁に使用した叙法副詞には共通するものが多い。また、使用頻度に関して、1 位から 6 位までは、学習者の使用頻度は母語話者より高いが、6 位から 15 位までは、母語話者の使用頻度が学習者より高い。つまり、学習者の叙法副詞の使用は集中していて、多様性が母語話者に達していないことが推測できるだろう。これは、4.1 の「母語話者の使用した叙法副詞の多様性は学習者より高い」という推測を裏付けている。具体的な叙法副詞の使用を見ると、1 位の「多分」の使用率

に関して、CNS、KNS、JNS はそれぞれ 57.98%、39.61%、57.67%であり、母語話者の 22.97%より大幅に高いことが分かる。日本語学習者は「推測」の意味を表す際に、「多分」を繰り返して使用する可能性が高い。最後に、上位 15 位の叙法副詞の使用において、CNS、KNS、JNS がそれぞれ独自に使用したものを挙げておく。CNS は「きっと」「なかなか」「なるべく」の 3 つ、KNS は「なぜ」「当然」の 2 つ、ENS は「大抵」「どうしても」の 2 つである。

#### 4.3 日本語学習者における叙法副詞の誤用

本節では学習者の使用例から見られた誤用をまとめる。李 (2011) の分類に倣い、叙法副詞の選択、文末モダリティーとの共起という 2 つの視点から、学習者の産出文を分析してみたところ、主に A 類の類義副詞の混同、B 類の叙法副詞と共起する文末モダリティー表現の不使用、C 類の叙法副詞と共起する表現の誤用の 3 種類の誤用タイプがあった。まず、A 類の類義副詞の混同。叙法副詞には類義語が多いため、それらの区別は学習者にとっては難しいだろう。B 類は、いわゆる叙法副詞と共起する文末モダリティー表現を使うべきところに使っていない誤用である。下記にある B 類の誤用例は「ぜひ」の誤用である。「ぜひ」はよく依頼表現「～てください」、願望表現「～たい」とともに使われるが、この誤用例は適切な文末モダリティー表現の不使用により、「行く」という行動の主体が「自分」になり、会話に不自然さが生じている。C 類は、叙法副詞と共起する表現の誤用である。ここでいう共起表現は文末表現に限らない。

##### A 類義副詞の混同

誤用例：宿題は必ず (→絶対) やっていない。

##### B 叙法副詞と共起する文末モダリティー表現の不使用

誤用例：a さん：有名なところ、観光スポットを教えてください。

b さん：んー、レティエロ公園、ぜひ行きます。→行ってください。

a さん：そうですか。

##### C 叙法副詞と共起する表現の誤用

誤用例：なかなか慣れる (→慣れないです) ようになりました。

暖かくて、まるで春の (→春のような) 感じがします。

#### 5. まとめと今後の課題

本調査は大規模の日本語学習者コーパス I-JAS を利用し、CNS、KNS、ENS の叙法副詞の使用状況を日本語母語話者と比較しながら、考察した。その結果、CNS、KNS、ENS の叙法副詞の使用について、以下のことが明らかになった。

- ①日本語学習者は「推測」を表す叙法副詞を多く使用しており、「勧誘・申し出」「意志」を表す叙法副詞の使用例が見られなかった。さらに、学習者の叙法副詞使用の多様性に欠けることも明らかになった。

- ②日本語学習者にとっては、N4、N3 レベルの叙法副詞は習得しやすい。N2 レベルでは目標叙法副詞の数が一番多いが、習得しやすいものがあれば習得しにくいものもある。N1 レベルの叙法副詞は学習者にとって習得しにくい。
- ③JAS における使用頻度の上位 15 位の叙法副詞を見ると、学習者は 60%の副詞が日本語母語話者と共通しているが、CNS、KNS、JNS がそれぞれ独自に使用したものも見られた。
- ④母語に関わらず、類義副詞の混同、叙法副詞と共起する文末モダリティー表現の不使用、叙法副詞と共起する表現の誤用という 3つの誤用タイプが見られた。

最後に、本調査の今後の課題について述べる。本調査はあくまでも網羅的に日本語学習者の使用傾向を考察してきたが、コーパスのタスクの種類が限られたため、産出されていなかった叙法副詞の習得状況は見られず、学習者の叙法副詞の使用状況を十分に考察できないところがある。今後、アンケート調査などの方法を用い、引き続き調査する。また、学習者の属性、いわゆる母語の影響、日本語能力レベル、学習環境、などの要因と使用状況との関連性について本調査では考察できず、今後はさらにデータを収集した上で詳しく考察を行う。

#### 参考文献

- 工藤浩 (2000) 「副詞と文の陳述のタイプ」『日本の文法 3 モダリティ』188-191 岩波書店
- 国際交流基金 (2002) 『日本語能力試験出題基準』 凡人社
- 張 璇 (2009) 「陳述副詞の習得上の問題点に関する研究—中国人日本語学習者を対象として—」『教育学研究紀要』55 525-530 中国四国教育学会
- 李 明 姫 (2010) 「中国人日本語学習者音声資料を利用した誤用分析--副詞の使用とその誤用傾向について」『東アジア日本語教育・日本文化研究』13 161-172 東アジア日本語教育・日本文化研究学会
- 李凌云 (2011) 「日本語の陳述副詞の習得について」『東アジア日本語教育・日本文化研究』14 537-551 東アジア日本語教育・日本文化研究学会